

図書室だより

1月号



平成30年1月9日
春日部市立東中学校

あけましておめでとうございます。新しい年が始まりました！「初日の出・初夢・初詣」など、縁起がよいのがお正月。みなさんは、お正月をどのように過ごしましたか？

正月には家に歳神（としがみ）さまをお迎えし、祝う行事があります。歳神とは1年の初めにやってきて、その年の作物が豊かに実るように、家族みんなが元気で暮らせる約束をしてくれる神様です。正月に「門松・しめ飾り・鏡餅」を飾ったりするのは、すべて歳神さまを心から歓迎するための準備です。 「日本文化いろは事典より」

新しい年になると、急に人気者になるのがその年の干支（えと）。今年の干支は、十二支の11番目の「戌」（イヌ）です。戌は、滅（めつ）「ほろぶ」の意味で草木が枯れる状態を表しています。しかし、イヌはたくさんの子どもを一度に産むので、イヌの安産にあやかるようにとの願いから安産のおまもりになっています。また、呪文に「戌亥子丑寅」（いぬいねうしとら）というのがあるが、これはイヌに追われたり、囲まれたりしたとき、この呪文をとえつつ、五本の指を折ると、イヌが退散すると考えられていました。

◎今月のおすすめの本 干支・イヌがテーマの本◎



〈十二支のはじまり〉

昔、神様が動物たちにオフレを出しました。「正月の朝、御殿に来るように。来た順に、一年ずつその年の大将にする。」正月の朝、動物たちが神様の御殿へ1番のりをめざします。十二支の由来話。十二支の動物たちがどんなふうになったのかこの本を読むと分かります。

〈デューク〉（江國香織）

教科書にも載っていたお話です。沢山の愛情を注ぎ、共に生きてきた愛犬のデュークが亡くなってしまい、主人公のわたしはとても絶望します。デュークと楽しかった思い出の日々を懐かしみ、子どものようにぼろぼろと泣くわたしの前に、ハンサムで不思議な少年が現れます。デュークを愛おしいと思う気持ちが起こした奇跡の一日の物語です。晴れた冬の一日を彼と過ごした私が受け取ったメッセージは、「つめたいよるに」という、21編からなる短編集のお話のひとつで心が暖くなる一冊です。大学入試にも出題されました。

〈ソウルメイト〉（馳星周）

犬は人の言葉で話すことはできません。でも、人間同士以上に心を交わし合うこともできる動物です。思わず涙こぼれる犬と人間の心の触れ合いが、七編の短編集になっています。

〈約束の森〉（沢木冬吾）

殺人事件で妻を亡くした、どこか影のある元刑事奥野。彼は、北の僻地にある別荘の管理人を務めることになる。やがて明らかになる謎の組織の存在。一度は死んだ男が、人間に虐待され人を信用していない警備犬候補のドーベルマン、マクナイトと共に再び立ち上がる。

<フランダースの犬> (ウィーダ) 19世紀のイギリスの作家

ネロは、牛乳配達の道端で、年老いて死にかけていた捨て犬パトラッシュを見つけ飼うことになります。クリスマス为数日後に控えたある日、優しかったゼハン爺さんを亡くします。クリスマスの前日は、年に一度の絵画コンクールの結果発表日でもありました。残念ながら、ネロは落選してしまいます。寒さと飢えに耐え、震えながら死の眠りに落ちかけたその時、イエスの姿を見ることができたのです。クリスマスの朝、ルーベンスの絵の前で愛犬パトラッシュを固く抱きしめたまま共に冷たくなっている少年が発見されます。

<名犬ラッシー>(エリク・ナイト)

イギリスに住むジョンは、迷子の子犬ラッシーを拾い育てることになります。ジョンとラッシーは、プリシラと友達になり楽しい日々を過ごしていました。ラッシーはスコットランドへ連れ去られてしまいます。ジョンを恋しがるラッシーを哀れに思ったプリシラは檻のカギを開けてラッシーを逃がします。自由になったラッシーの、ジョンの元へ帰る冒険物語。

『祖国とは国語』藤原正彦 著

藤原氏はこの本の中で、「中学校時代の読書で感動とともに胸に吸い込んだものは50年近くたった今日に至るも消えず、私の情緒の一部となっている。余談だが、30代の頃、ある雑誌に『幼少時に読んでもっとも影響された本を再読して感想を書け』という原稿を依頼された。『クオレ』を取り出して読み直してみた。さほど感動しなかった。私はこの時、『中学生の時読んでおいてよかった』とつくづく思った。」「しばらく前のことだが、少年少女文学全集といったシリーズの広告の帯に、『早く読まない大人になっちゃう』という文句が添えてありほとほと感心したことがある。情緒を養ううえで、小中学生の頃までの読書がいかに大切であるかということだ。」と述べています。



○読書の力 本は心の栄養○



◇人とのふれあい◇

皆さんは、本を朝読書以外に読んでいますか？本の世界の中では普段あまり接することのない人々と触れ合うことができます。それは、お年寄りの知恵だったり、障害のある方の思いだったり、外国の人のお考えだったり、…遠い古(いにしえ)の人々とだってお話することができるのです。本を読むことで、さまざまな人がいて、いろいろな考え方や、感じ方があるということ、頭ではなく心で理解し、人を思いやり、相手の立場に立って考えることができるようになります。そう、本は新しい知識を得られるだけでなく、気持ちも暖かくなったり、ドキドキしたり、ワクワクしたり、悲しくなったり、そして感動したり・・・いろいろな気持ちにさせてくれる、私たちの素晴らしい友だちです。本は「心の栄養」です。たくさん本を読んで心を大きく大きく育てましょう。さあ、貴方も本の世界の旅へでかけてみませんか？そして、運命の1冊と出会い、人生を豊かにしてください。あらためて、本を読む幸せを感じてみませんか？今年もどうぞ宜しくお願いいたします。